

『蜻蛉日記』上巻の桃の節供の日とその翌日の場面

堤 和博

はじめに

前稿『『蜻蛉日記』上巻の桃の節供の折を逸した贈答歌⁽¹⁾』に引き続き、『蜻蛉日記』上巻三年目の桃の節供の日とその翌日の様子を描いた場面を取り上げる。論述の都合上、また、後に引用する部分との区別を明確にする必要上、この場面を①とする。⁽²⁾

① 年かへりて、三月ばかりにもなりぬ。桃の花などや^①

取り設けたりけむ。待つに見えず。いまひとかたも、例
は立ち去らぬ心ちに、けふぞ見えぬ。さて、四日のつと^②
めてぞ、みな見えたる。昨夜より待ち暮らしたる者ども、^③
「直あるよりは」とて、こなたかなた、取り出でたり。心^④
ざしありし花を折りて、内のかたよりあるを見れば、心^⑤
たゞにしもあらで、手習ひにしたたり。^⑥

待つほどのきのふすきにし花のえはけふ折ることぞ
かひなかりける^⑦ (29・道綱母)
と書きて、よしや、憎きに、と思ひて、隠しつるけしき^⑧

を見て、奪ひ取りて、返ししたり。

三千年を見つべきみには年ごとにすくにもあらぬ花
と知らせむ (30・兼家)

とあるを、いまひとかたにも聞きて、

花によりすくふことゆゝしきによそながらにて
暮らしてしなり (31・為雅)

前稿では④の中の三首の和歌の解釈を考えた。その際、特に波線部「すき(く)」の掛詞の問題に十分注意した。本稿では、種々の徴証から類推される当時の状況なども視野に入れながら主として地の文にあたる部分の解釈を考え、前稿で検討した和歌の解釈と併せて、④に描かれる場面の実態の究明に努め、④が持つ意義などにも迫っていききたい。

一

まず、①から③にかけてを考察する。①の中で助動詞「け

む」が使われているのが気に掛かるので、ここから検討したい。『対訳』では「執筆時に明確な記憶がないので、次の歌から、これかそれだったのかと推量した。」と説明している。このような説明は、結婚した年の秋のことを描く次の記述になら当て嵌まるであろう。

又、程経て、見え怠るほど、雨など降りたる日、「暮に
来む」などやありけむ、

柏木の森の下草くれごとになほ頼めとや漏るを見る
見る (18・道綱母)

「けむ」の直後に自歌が書かれてあり、「けむ」の直前の事柄を残されている自歌から推量したというわけである。翻って④では、歌の内容と「けむ」の直前の内容は合うが、「けむ」と歌との間は比較的遠く、その間には歌に至るまでの細かい事柄も書かれてあって、これらの点からすると「けむ」の直前の事柄を次の歌から推量したというのは不自然であると思われる。

よって、『全注釈』が「その時桃の花などを飾ったである

うか、そうしたと思うが……と、不確かな記憶をたどっている。(……は原文)と、歌とは関係なしに説明するのが当を得ていると一応は考えられる。「不確かな記憶」なのは、道綱母自身が桃の節供の準備全般を命じたり取り仕切ったりしたのではなく侍女達が自発的にやったからだろうと一応説明がつく。侍女達が自発的にやったのは、⑤の記述とも整合する。

しかし⑤も含めてここで注意しておきたい点がある。旧稿⁽⁴⁾で確認した事柄なのだが、この頃の道綱母の侍女には道綱母の意向を汲んでの言動が目立つ点である。道綱母は桃の節供の宴を期待しており、また実は四日になって一日遅れでも宴をやりがついでいて、そんな道綱母の意向を侍女達が汲み取つての①乃至⑤の行動だと考えられるのである。特に⑤などは、「昨夜より待ち暮らしたる者ども」で侍女達を指しており、あたかも侍女達自身が宴をやりがついでいて自分たちの意思で宴の準備を始めたかのように書いてあるが、侍女達が道綱母の意向には拘わらずにそんな風に事を運ぶとは想定し

にくいのである。

また、特に⑥について見ると、準備を全般的には侍女達がやったとしても⑥の「心ざしありし花」は作者のやったことであり(これについては第三節で検討する)、ここが確かな記憶であるようなのと①が「不確かな記憶」であるというのは齟齬を来すであろう。

話が錯綜してきたが、以上を総合して考えるに、実質的に事を進めたのは侍女達だとしても①もやはり実際には「不確かな記憶」ではなく、わざと「けむ」を使って書いているとみるのがよからう。ではなぜそんな書き方をするのか。それは⑤も含めて言わば傍観者的に記述したいからではないだろうか。⁽⁵⁾そう考えて直後の②を見ると、ここでは珍しく正直な気持ち直截に吐露している。そんな期待感をなるべく弱めたい記述が①の「けむ」や⑤の書き方になったと考えられよう。それが②や⑥では正直な気持ちの方が表に出てしまっているのである。

さて、ここまでの検討からすると、道綱母は兼家の来訪を

下待ちにしていたと思われるところに次に注意したい。侍女達もそんな道綱母の気持ちを何も言われなまま付度して準備していたのである。これまで私は㉔を読んで、兼家が節供の日の来訪を約束していたと思ひ込んでいた。しかしよく読んでもそんなことは書かれていない。約束があったのなら、当然道綱母の記憶に残っていたであろうし、花の準備がなされるのも当然で、「けむ」の使用には無理がある。節供の日の兼家の来訪を道綱母あるいは道綱母邸の皆が、何も言われなまま期待していたのが真相で、そこに「けむ」を使用する余地が生じたと目される。③の記述を見ても、為雅も約束していたわけではないがしよつちゅう来ている為雅なら節供の日の来訪は兼家以上に期待された、でも来なかった、と読み取れる。兼家にしても為雅にしても、特に兼家については、来訪を約束していたのなら、もっと違った書き方がなされていたであろう。

このような状況を想定して論を④に進める。②③では、約束のないまま来訪を下待ちにしていたがその期待が外れてがっかりという様子が想像されるが、とすると、④では一転して嬉しい気持ちになったと想定されるではないか。㉔を分析する諸注釈書は、節供の日に兼家が来なかった道綱母の期待外れ感や腹立たしさを強調する。当時の貴族が（特に女性貴族がとも言えるかもしれない）「折」を大切にしていたの（を）思うと、なるほど道綱母に期待外れ感があったであろう。でも㉔においては、嬉しさの方が少なくとも④の時点では強かったと思われるのである。そんな道綱母の気持ちに既に触れた⑤の侍女達の行動に繋がるのである。

この読み取りと推論をたすけるために、兼家が三日に何をしていたのかを考えておきたい。この件については、『全注釈』の考察が参考になる。『全注釈』は当時の三月三日の宮中における御燈の儀と曲水の宴に関する記録にあたり、かつ、兼家詠で飲酒が詠み込まれていることと併せて、この年宮中

で曲水の宴が行われたと推定している。前稿で示した兼家詠に対する私解からすると兼家詠が昨晚の曲水の宴に言及しているとは考え難いのだが、それはともかくとしても、御燈の儀か曲水の宴が行われたとすれば、儀式が延びたかその終了後引き続き帰れないことがあり、来訪が翌朝にずれ込んだのであろう。為雅も同じ状況下にあつたとすれば、兼家同様翌朝に訪れているのも納得できる。そうすると、兼家も為雅も、もともと三日に来るつもりで、四日の朝には官中から直接来たと想定される。

官人である兼家の妻として、道綱母もかかる事情を理解できていたであろう。そこで、④の前年の冬に道綱母が兼家を門前払いにして『百人一首』に載る有名歌（27番）を詠み贈る場面を取り上げて、渡辺久寿が次のように述べているのに着目したい。⁷⁾

道綱母は不愉快そのものであるのだが、常識的には、兼家が「夕さりつかた、『内裏にのがるまじかりけり』とて出づる」ことは、官人の立場上充分にあり得ることで

あつた。夕方から急に出仕せざるを得なくなる事態も当然ないわけではない。尋常な状況であれば、そのことが理解できぬ妻ではなかつたはずの道綱母が、しかしながら「心得で、人をつけて見すれば」という行動に出たのは、別に血迷ったからでもなく、何とも理解できない、疑惑を誘ってやまぬ兼家の不審に彩られた態度ゆえであつたと解すほかはない。（波線は引用者）

特に波線部などに私も同感で、④の状況下においても道綱母は兼家の官人としての立場を十分に理解していたと考えられる。よしんば理解できなかったとしても、想像を逞しくすることになるが、年嵩の女房などが②にあたる頃に「今晩は儀式が延びているのでございましょう」などと言って慰めていたであろう。

ちなみに、前々年の十二月、横川に登山した兼家から雪に降り込められて下山できなくなつたという手紙がきて道綱母が23番歌を詠む記事がある。諸注釈書の指摘の通り『扶桑略記』などからすると、兼家は法華八講を聴聞する父師輔に従

って登山したと思われるのであるが、そんな事情には一切触れていない。兼家がなぜ来ないのかまたは来られないのか、その理由に道綱母あるいは『蜻蛉日記』は一々関心を示さなうと言えはそれまでなのだが、そのあたりの書かれていない事情にも要注意である。

このようなことからして、道綱母にとつて四日の朝になつてからやつて来た兼家の態度は、誠実なものとしてむしろ喜ばしかったであろうと想定するのである。同時に、そのような喜ばしい気持ちには触れていないところも銘記しておきたい。

三

⑤には既に触れているので、続いて⑥⑦の検討に移る。⑥⑦に言及する諸注釈書を見るに、大きく分けると二つの見方がある。多数意見は、〈道綱母が心積もりしていた桃の花を侍女が折つて(⑥) 侍女が邸の奥の方から持ってきたのを見

ると(⑦)〉、ととる。他方、〈兼家が心積もりしていた桃の花を宮中で折つて(⑥) 宮中の方から持ってきたのを見ると(⑦)〉、ととる説もある。

どちらかに確定するのは難しいが、幾つかの観点から考えてみる。まず、⑤の終わりの方からの続き具合を見ると、前者の解が自然である。後者でとるとすると、⑤と⑥の間に「一方兼家はとうとうと」ぐらいを補わなければならなくなる。また、⑥で「心ざしありし花」と回想の助動詞「き」が用いられているが、この助動詞の使用も前者で解した方が自然な用法である。もっとも、「三月には桃の花を持って行こうとかねて言われていた」と解する『大系』によれば、「き」が用いられていておかしくないかもしれない。が、「かねて言われていた」などを補わなければならないのは、苦しいであろう。

このように考えると、やはり多数意見に従つて前者でとるのがよからう。しかし一方⑦の中の「内」は「内裏」と解する方が自然のようでもある。そこで、「内」を〈奥〉ととれ

る例がないかと探すと、下巻九七四年四月の記事に次の用例が見出せる。兼家の異母弟遠度が来訪して「助」（道綱）と会する場面である。

助と物語忍びやかにして、さくに扇の打ち当たる音ばかり時々してゐたり。内に音なうて、やゝ久しければ、助に、「『一日、かひなうてまかでにしかば、心もとなさになむ』と聞え給へ」とて入れたり。「早う」といへば、みざり寄りてあれど、とみに物もいはず。内より、はた、まして音なし。

この場面での速度・道綱・道綱母の位置については曖昧で（道綱母の側には養女もいるのであろう）、複数の捉え方がある。そのうち、廂で対座する道綱と速度に対して道綱母は母屋にいるとみるのがよいと考える^①。この後で道綱母が簀子の明かりが消えていたことに気づいて狼狽える描写があるが、これも道綱母が母屋にいるからこそである^②。そうすると、母屋を「内」と称していることになる。

翻って④では、また憶測だが、夕べは母屋で宴をやる予定

だったのが、夜が明けて兼家が座する廂に場所が移ったのではないか。よって、母屋の方から廂に花が持ち出されてきたというのが「内のかたよりある」であろう。『全注釈』が「作者のいる位置は、廂あたりか。」と類推するのが、当を得ていると思う。

ところで、右に引いた速度来訪の場面は「物語的」とも特徴づけられる速度が養女に求婚してくる話の最初の方にあたる。『新編全集』が「内に音なうて」の「内」に対して、「作者のいる部屋の中から声がしない。「ここに音せで」とせず「うちに音なうて」と書いているのは、速度の視点になり、それだけ物語的表現に近い。」と注しているのは、的確な指摘だと考える。つまり、④では勿論道綱母の視点に立ち、物語的な速度の求婚の場面では速度の視点に立って、視点人物の座する廂から母屋を「内」と称していると解されるのである。

以上、⑥⑦の書き方や⑤から⑥への続き具合などを勘案すれば、折り取られた花は兼家が宮中から持ってきたのではな

く、道綱母邸で道綱母が用意していた物である可能性がより高い。

四

その花を見て⑧の心境になって歌を「手習ひ」にしたと⑨で言うのである。⑧での道綱母の心境を考えるためにも先に⑨について考察したい。

当時如何なる場合に歌を「手習ひ」にするのか。現実には『齋宮女御集』、物語では『源氏物語』などに幾つも例があるので、それらを集めて帰納的に判断した結果を当て嵌めるのが原則的な方法論である。ところが、道綱母自身の例は一例しかないのだが、それを見ると帰納的な結果とは齟齬するようなのである。その道綱母自身の一例は上巻後半九六六年五月にある⁽¹⁰⁰⁾。

「今年は節きこしめすべし」とて、いみじうさわぐ。いかで見むと思ふに、所ぞなき。「見むと思はば」とある

を聞きはさめて、「双六うたむ」といへば、「よかなり。

物見つくのひに」とて、目かちぬ。喜びて、さるべきさまのことどもしつゝ、宵の間、静まりたるに、硯引き寄せて、手習ひに、

あやめ草生ひにし数を数へつゝ引くや五月のせちに待たるゝ
(99・道綱母)

とて、さしやりたれば、うち笑ひて、

隠れ沼に生ふる数をば誰か知るあやめ知らずも待たるなるかな
(100・兼家)

といひて、見せむの心ありければ、宮の御棧敷の一続きにて二間ありけるを、分けて、めでたうしつらひて、見せつ。

五月の節会見物に棧敷を用意してくれるかどうか、兼家と双六で勝負して勝ち、喜んで99番歌を「手習ひ」にし、ここでは兼家に「さしやりたれば」と言う。兼家も「うち笑ひて」100番歌を返しているから、明るさに満ちた場面である。それで、道綱母の歌を見ると、結句にある「せちに」は、副詞「切

に」と節会の節との掛詞になっているが、これと同様の掛詞は他に見いだせない。また、副詞の方はどちらかと言えば口語的な言い回しだと言えよう。

一例から導き出すのは勿論危険ではあるが、道綱母が歌を「手習ひ」に書くのは、明るい場面で歌も口語的な掛詞（1）などを用いたものを詠む場合だと言えないであろうか。

これを④の「手習ひ」にも当て嵌めようとする、29番歌を99番歌とは正反対に⑩のようにしているのはどういふことが問題になる。そこで、「憎きに」に対して『抄』が「この歌のよみ口が憎いものの言いようだ」と解しているのと、『源氏物語』から用例を挙げながら同様の見解を示す次の『新大系』の注が注目される。

どうでもいい、いや味な歌なのだから。諸注「にくし」は兼家への気持と解するが、自歌についての評か。「げに憎くも書いてけるかなと、はづかしくて引き破りつ」

（源氏物語・浮舟）

これに従うと、出来上がった自分の歌を嫌味な歌だと感じ、

兼家に見せる気がせず一応隠そうとしたのだと見做せるのである。

ではなぜ自ら嫌味な歌だと思ったのか。それはここまでの検討、特に④までの検討と前稿で検討した道綱母の29番歌の解釈を併せれば説明がつくと考える。宮中で御燈の儀か曲水の宴があつてその延引等のために四日の朝になって宮中から兼家は直接来たのだが、その誠実とも言える兼家の態度が道綱母は本当は嬉しかったのだ。それで歌も「手習ひ」にしてゐる。にもかかわらず歌そのものは、「待っていた昨日の節供の日は過ぎ、用意していた花の枝も無意味に過ぎてしまい、その花の枝をこうして今日折つても甲斐のないことだったなあ」と、節供の日に来なかつた兼家を皮肉を込めて責めた歌になつてしまい、それを嫌味な歌と自ら感じたのが「憎きに」だと解されるのである。

五

⑨と29番歌の内容、加えて⑩あたりまでを以上のように分析した上でここで⑧に戻り、桃の花の枝を見て「心たゞにしもあらで」29番歌を詠んだというのはどう解されるのか考えたい。

まずは大方の解釈を確認すると、例えば『対訳』の「昨日あんなに期待して、待ちこがれていたのを思い出して、急に腹が立つてきたのである。」というような解が多数を占めている。

「心たゞにしもあらで」についても勿論用例から意味を判断したいのだが、『蜻蛉日記』中には類似表現も含めて用例は見当たらない。ただ、「ただなり」乃至はその類似表現が否定で用いられている例なら幾つかあるのでそれを参考に考える。そうすると、この表現は文字通りには(常態ではない)という意味になると思うが、悪い方向に大きくぶれている場合がほとんどである。現代語でも言う「ただならぬ雰囲気」とかと同じであろう。典型的な例を⑪の近くから挙げると、同年の秋、小弓の矢とともに40番歌を兼家に贈る直前の記述

中にある。^⑪

たゞなりし折は、さしもあらざりしを、かくこゝろあくがれて、いかなる物も、こゝにうち置きたる物、とゞめぬくせなんありける。^⑪

本文に大いに問題がある箇所であるが、「かくこゝろあくがれて」以下は「たゞなりし折」ではない。「折」を指し、それこそただならぬ状態を言っているのは間違いないところである。このように、他の用例から判断しても、『対訳』の波線部のように、ここでは感情を害している方向で解釈する訳には首肯されるのである。

しかしここにも疑問がある。期待を裏切られて立腹したと解するわけであるが、先に確認した通り、この期待は兼家もたらしたのではなくて、道綱母が言わば勝手に期待していたのである。それなのに立腹するであろうか。しかも「たゞならず」と言う程にまでである。もしそんな風に立腹するのであるなら、次に掲げる篠塚純子の^⑫ような理解に行き着くであろう。

昨日という「折」を外されてしまったとの思いがこみ上げてきたからでしょう。彼女にとつて、「折」を過ごしてしまつたことは、もう取り返しのつかないことでした。

桃の節供のその日に、夫と逢うのでなければ、彼女の心は決して充たされなかつたのです。「折」を無に過ごされてしまつた心の空しさを道綱母は兼家に訴えてみたかつたのでしよう。その空しさは、今日、夫が訪れてきてくれたうれしさによつて帳消しになるものではないからです。
すゝ（波線は引用者）

「折」を外されてしまつた」のが道綱母にとつて重大事だつたというわけである。第二節でも一言したようにそれはそれで間違いないであろう。が、右の理解によれば、これも先に確認した兼家の官人としての立場なども道綱母は全く顧慮できないまま、自分の期待通りに兼家が振る舞うのを求めていることになりはしないか。とにかく、右の理解は極端に過ぎると思うのである。それよりも、篠塚も波線部の中で「訪れてきてくれたうれしさ」があるのは認めており、その点を

見落としてはならず（少なくとも實際面を考える際には）、④などでは「うれしさ」の方が強かつたと想定される。念の為に付け加えておくと、節供の日に「空しさ」を感じたのは間違ひなからう。それが結局29番歌のような歌になつたのだ。よつてその「空しさ」が④で「帳消しになるものではない」のも確かだろうが、とにかく篠塚の理解は「折」を重視し過ぎた極端なもので、道綱母は「訪れてきてくれたうれしさ」も十分に感じていたのであり、「空しさ」だけを訴えたかつたのではないと考えるのである。

このように考えてくると、⑧の記述をそのまま道綱母の實際の心境だとみるのには、躊躇される。そこで、『大系』が⑧から次のような微妙な心理を読み取っているのが目を引く。

待っていたのに昨日は来なかつた、でも来たのだからうれしという矛盾した錯雑した感情の高まりで、手習のふりをして歌を作つた。

ここで④⑤⑥⑦の状況や書き方も関連してくる。④では「訪

れてきてくれたうれしさ」があっても“来た”という事実のみが書いてある。⑤は自分の意向を汲んでの侍女達の行動を傍観者のように書いてあり、実際傍観者のように侍女達が準備するのを見ていたと思う。一方、⑥⑦で自分の「心ざしありし花」が持ち出されて、昨日の「空しさ」の方がまた擡げてきたと考えられる。この後を見ても、次の⑨で「訪れてきてくれたうれしさ」が、29番歌と⑩では「空しさ」が表れていると理解できるのである。

ということ、前後の記述やそこから想定される道綱母の様子も勘案すると、⑧では「空しさ」と「訪れてきてくれたうれしさ」の「矛盾した錯雑した感情の高まり」があったと見做される。しかし、用例の件に戻ると、⑧と類似した表現で同様の意味を表す例は見られない。交々考慮するならば、⑧では道綱母は自分の心境を真つ正直には書かず、腹を立てたかのように記述しているとみることができるであろう。あるいは、そこまで作爲的に記述したとみなくとも、とにかく「感情の高まり」ところを、「うれしさ」の方がなるべく消

える表現として選ばれたのが、「心たゞにしもあらで」であったのかもしれない。

六

以上、④の道綱母詠の直後までを五つの節に区切って検討してきたが、その内容を纏めておこう。

桃の節供の日の兼家来訪を道綱母は期待し、道綱母邸では侍女が宴の準備をして待っていた（姉夫婦も同じような状況にあった）。道綱母自身も「心ざしありし花」を用意していた。結局兼家も為雅も節供の日には来ずに二人は翌朝になってやって来た。道綱母は嬉しかったであろう。そこで侍女達が宴の準備を始めたと言うのだが、これは道綱母の意向を汲んでの行動と目される。宴の準備がなされる中「心ざしありし花」が折り取られてきたのを見た道綱母は、昨日の「空しさ」と今朝の「うれしさ」の「錯雑した感情の高まり」から歌を「手習ひ」にした。「うれしさ」の方を詠むつもりであ

ったのだろうか、「心ざしありし花」を見て詠んだせいか、

「空しさ」を詠んだ嫌味な歌になってしまったので兼家から隠そうとした。

なお、兼家が来るか来ないか分からないまま三日の日を過ぎ、三日のうちには結局来なかったのだから、兼家は余所の女（町の小路の女の可能性が最も高いか）の所で節供の日を過ごしているのかと道綱母は疑っていたとも想定できる。

そしてその間の思いを29番歌に込めたとも想定できよう。あるいは、そんな疑いはなくとも、疑っている体で29番歌を詠むというのもあり得ることである。実際多くの注釈書はどちらかの想定に立って29番歌を解釈し、その際「すき」には「好き」が掛けられていると目していると思われる⁽⁷⁾。しかし、前稿における検討によれば、この掛詞を認定するには解釈上無理があり、29番歌は他の女のことは意識されずに準備されていた桃の花に焦点を中てて兼家が昨日来なかったことそのものに関して詠っていると解されるのである。

七

さて、④について、篠塚純子の見解を第五節で少し取り上げ、それを極端なものと批判したが、篠塚の見解と半分重なる見解を示すのが『全訳注』である。

(甲) この項を見るかぎりでは幸福な時期のように見えるが、町(丙)の小路の女の一件があり、桃の節供の日でも夫と桃の花酒をくみ交わすことのできない多妻下の作者の悲しい姿が髻(乙)とする。

解釈のみならず、④における道綱母の生活実態にも迫ろうとしていると思うのだが、その上で私の考えを述べると、私に記号を付した(乙)そのものには同意するが、それに(甲)の限定がついているところに異論がある。(甲)からすると、少なくともこの前後の場面も考慮に入れたら(丙)のような姿が結局浮かび上がってくるというわけであろうが、果たしてそうであるうか。④の前の場面は前年の秋に『百人一首』に載る有名歌(27番)とそれに対する返歌(28番)を遣り取りするところ

が中心となっている。また、㉔の直後にはこの後ですぐに取り上げる姉との離別の場面などがある。それらに挟まれて㉔があることを考慮して(㉔)のような理解の仕方は避けなければならないというのであろう。それは周到な読みようであるが、ここに落とし穴がある。㉔の前の記事から㉔までは四五ヶ月は経過している点である。その間ずっと道綱母の嫌疑は悪かったわけではなく、気持ちを持ち直していたと想定できないであろうか。しかし、『蜻蛉日記』には嫌疑が良くなるような事柄や経緯は書かれないのである。¹⁸

このように考えると、『全注釈』の見解が浮かび上がってくる。

平穏な春の一日の、歌にちなむ風流談である。前段と趣ががらりと変る。つまり、作者の生活はかくのごとく明暗織りなしていたということになる。

本稿における検討と前稿で解釈を施した兼家詠、為雅詠も併せると、㉔からは「多妻下の作者の悲しい姿」ではなく、

「明」の状況が掘り起こせたと見えよう。やはり「前段と趣

ががらりと変」ついているとみるのが蓋然性が高い。

では、実は「明」である㉔をなぜ『蜻蛉日記』に入れたのであろうか。実生活上は「明暗織りな」す中から、㉔のようなどころを飛ばして次の姉との離別のようなどころを中心に描く記述を続けんとするのが、『蜻蛉日記』であるのではないか。前稿での分析によれば、歌を見ても道綱母が拘る古今調の正統な詠み振りには結局なっていないので、道綱母がこのような歌をどうしても『蜻蛉日記』に載せておきたかったとも想定しづらい。

そこで本稿での考察を通じて改めて浮かび上がってくるのが『新典社新書』でも示した考え方¹⁹である。それをここでは繰り返すのをご容赦願いたいのだが、そのために㉔に続く記述から姉との離別の場面までを、それぞれ㉔として引いておく。㉔㉕の連続と連動の相を探れば、㉔の存在意義も自ずと明らかになってくると考えるのである。

㉔ かくて、今はこの町の小路に、わざと色に出でにた

り。本つ人をだに、あやしう、悔しと思ひげなる時がちなり。いふかたなうこゝろ憂しと思へども、なにわざをかはせむ。

◎ このいまひとかたの出で入りするを見つゝあるに、今は心やすかるべき所へとて、みてわたす。とまる人、まして心ぼそし。「影も見えがたかべいこと」など、まめやかに悲しうなりて、車寄するほどに、かくいひやる。

なかゝゝる嘆きは繁さまさりつゝ人のみかるゝ宿と
なるらむ
(32・道綱母)

返りごとは、男ぞしたる。

思ふてふわがことのはをあだ人のしげき嘆きに添へ
て恨むな
(33・為雅)

などいひおきて、皆渡りぬ。思ひしもしるく、たゞ、独り、臥し起きす。

㊸は「かくて」で㊶を受けながら話題を転じて、㊶の前の話題の町の小路の女のために苦しんでいることにまた話を戻

している。㊸の書き方を見ると、と言つても「本つ人をだに」あたりには誤脱があるようで残念なのだが現存本文をもとに校訂する限りでは、兼家の言動については抽象的にしか書かれていないところに注意したい。なのに、我が苦しみの方は相当であるような書き方になっている。

次に㊸になるのだが、冒頭は「このいまひとかた」となつていて、㊶の中に二カ所ある「いまひとかた」を受けて始まっている。ということは、㊸も㊸を飛び越して㊶を受けているのである。そこで、気になるのは、㊶までは姉の夫はおろか姉の存在にさえ言及していなかつた点である。そして㊶と㊸は姉乃至は姉夫婦繋がりとなっているのである。また、㊸では姉との離別の悲しみのみならず町小路の女に由来する兼家から受ける苦しみも相乗的に増していくよう書かれている点も見逃せない。それを端的に示しているのが32番歌であるのは贅言を要しないであろう。その歌の読み振りも、掛詞を使つて心情と物象(木)を絡める古今調の読み振りになっている。最後の一文にも、姉とは会いにくくなって独りぼっち

になったという意味と、兼家が来ずに独りぼっちだという意味が二重に込められている。ということは、㉔は㉕を完全に飛び越えてしまっているのではなく、内容面では㉕を受けているのである。

とにかく、㉔について見れば、姉との離別と町の小路の女に由来する兼家の仕打ちという悲しみと苦悩の二つに苛まれる我が身を主人公とした歌物語の様相を呈していると言っても過言ではないほどである。そんな記述に対し、悲しみの伏線となるのが㉔で、苦しみの伏線（伏線と言うにはあからさまだが）が㉕であると捉えれば、分かり易いであろう。特に㉔は「明暗織りな」寸道綱母の生活の中でも実は「明」の方であったので、これを描くと町の小路の女による苦悩が薄れかねず、それで㉔の後には㉕で町の小路の女に改めて言及する必要があったとも言えよう。たとえ兼家の行動については抽象的であつてもである。

ここまで考えて㉔を見直すと、明るさはなるべく消えるような書き方がなされているのに改めて注意される。繰り返し

になるが確認しておく。①の中の「けむ」の使用からして、そうで、④では“来た”という事実だけが書いてある。⑤も侍女達が自分達の意味で事を進めたように読めてしまうのである。⑧も、腹立たしさが読み取れる書き方として、あるいは、「うれしさ」がなるべく消える書き方として選ばれた可能性がある。勿論②⑥など、道綱母の気持ちが表示されている記述もあるが、明るさはなるべく消えるように書かれているとは言えよう。明るいところは明るく書いた方が、後の悲しみが対照的に強くなる気もするが、そこは『蜻蛉日記』全体としては「思ふやうにもあらぬ身の上」を描きたいという意思の表れだと考えられる。

そういう意味では、姉との離別の場面も要注意である。兼家の訪れはなく姉とは別れて自分は「独り」だと最後に言うのであるが、道綱母の身近には母親がいる。上巻後半部には母親が死ぬ時から一周忌にかけての顛末が描かれるが、そこでの道綱母の悲しがりようは尋常ではない程だ。それだけを見て二人の紐帯は相当に強かったと思われ、姉との別れの

時も母親が身近で慰めてくれたに違ひなからうが母親の存在には触れずに「独り」と言うのである。こちらの方は「思ふやうにもあらぬ身の上」を強めようとしている。

おわりに

以上の通り、その連続と連動の相も考慮しながら④⑤⑥について検討すると、道綱母は特に④では実態をそのまま描くのではなく記述していたと目されるのである。その目論むところ、やはり「思ふやうにもあらぬ身の上」を描くところにあつたのであろう。④の実態などは当時としては「思ふやう」な状況にかなり近いものだったと思うのだが、そこは薄れるように書いてあるのである。そんな書き方は従来指摘され注意されてきたところである。一方で、④⑤⑥の言わば構成にまで気を配っている点は、今後も注意したい。

ところで、『一条撰政御集』冒頭の八つの段から成る歌物語的部分の一段目は八つの段で描かれるテーマを冒頭で提示

する序文・序段の役割を担っているとかつて考察したことがある²¹⁾。そしてそれは作者藤原伊尹の作意によるものだろうと考えた。さらに、二本の拙稿²²⁾において『蜻蛉日記』の兼家からの求婚場面を取り上げ、この場面が上巻前半部の言わば「序段」の役割を果たしているという考えも示した。これは道綱母の作意による結果ではないだろうと当初は考えていたのだが、道綱母にも「序段」として役割を持たせようとの意図があつたのではないかとこの考えに傾いてきている。

何が言いたいかというと、兼家の求婚場面にしても④⑤⑥にしても、相応に広い部分を見通しながら記述が成されていのではないか、一言で言えば道綱母は記事の構成までも考慮しながら記述しているのではないかとこのことである²³⁾。

【注】

(1) 『詞林』60号・二〇一六年一〇月。論述の都合上、本稿と前稿で一部内容の重複するところがある点ご容赦願いたい。なお、前稿と本稿で取り上げた場面は、新典社新書

41 『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』（二〇〇九年一〇月）でも少し言及している。また、二〇一一年和歌文学会五月例会（五月二一日・鶴見大学）における研究発表

表「『蜻蛉日記』上巻前半の和歌―桃の節供の翌朝の場合―」では詳細に取り上げた。本稿の内容は、これらの内容からは大幅に変更している。和歌文学会の折に種々ご教授をたまわった方々には、改めて御礼申し上げる。なお、以下右の拙著を指して『新典社新書』ということにする。

(2) 『蜻蛉日記』の引用・歌番号は、角川文庫『蜻蛉日記』（柿本奨・一九六七年一二月）による。底本は宮内庁書陵部本。傍線等は私に付した。

(3) ここで本稿で引用・言及する諸注釈書を、本稿で使用する略称とともに列挙しておく。引用に際して傍線等は私に付した。

『大系』―川口久雄 日本古典文学大系『土左日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』（一九五七年一二月・岩波書店）。

『注解』―秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解七」（『国文学解釈と鑑賞』27巻12号・一九六二年一月・至文堂）。

『全注釈』―柿本奨『蜻蛉日記全注釈上巻』（一九六六年八月・角川書店）。

『抄』―三宅清『かげろふ日記抄』（一九六八年）。

『全訳注』―上村悦子 講談社学術文庫『蜻蛉日記(上)全訳注』（一九七八年二月）。

『全評解』―村田順『かげろふ日記全評解上』（一九七八年一月・有精堂）。

『対訳』―増田繁夫 全対訳日本古典新書『かげろふ日記』（一九七八年一二月・三省堂）。

『集成』―犬養廉 新潮日本古典集成『蜻蛉日記』（一九八二年一〇月）。

『新大系』―今西祐一郎 新日本古典文学大系『土左日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記』（一九八九年一二月・岩波書店）。

- 『新編全集』—木村正中・伊牟田経久 新編 日本古典文学全集『土佐日記蜻蛉日記』（一九九五年一〇月・小学館）。
- (4) 「若き御心（心地）」に考—『蜻蛉日記』上巻の侍女の言葉—（『解釈』第55巻3・4号通巻647集・二〇〇九年四月）。
- (5) 『全評解』が「桃の花などや、とりまうけたりけん」と、他人の事のように言っているところを見ると、作者は節句の準備などは、すべて侍女たちに任せきりで、自分は何もしなかつたらしい。と言うのは示唆的である。
- (6) 前稿の注9でも引いた『注解』参照。
- (7) 「制度を越える力—『蜻蛉日記』の意義—」（『王朝女流文学の新展望』二〇〇三年五月・竹林舎）。
- (8) 『注解』参照。
- (9) 前稿の注4参照。
- (10) 引用した前後も含め、道綱母・道綱、遠度の位置や異動の様子については、『新編全集』が周到に追っている。『新編全集』の捉え方に従いたい。
- (11) 倉田実『蜻蛉日記の養女迎え』（二〇〇六年九月・新典社）「速度の求婚作法」でも、「作法」の観点から三者の位置関係を見定めている。道綱母の位置については、母屋であると見做している。
- (12) 「手習ひ」はもう一例下巻九七二年二月にもあるが、これは「小さき人」（養女）に習字を教える意であり参考にはならない。
- (13) 29番歌の掛詞については、前稿で「過ぎ」「好く」「飲⁺く」の可能性を考えたと。いずれにしても口語的なものであろう。また、「飲く」ならば飲食を詠み込んでいることにもなる。
- (14) ここは「離婚状態の時の道綱母の歌—「矢といふにこそ」詠を巡って—」（古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考第31集』二〇一五年一〇月・新典社）で取り上げた。論文表題にも表しておいた通り、道綱母と兼家の夫婦仲はただならぬ状態の時であった。
- (15) 「くせ」は宮内庁書陵部本のまま。角川文庫本は「と

き」と校訂しているが、多くの注釈書は宮内庁書陵部本のままで「癖」と解しており、ここは通説に従った。

(16) 『蜻蛉日記の心と表現』(一九九五年四月・勉誠社)。

(17) 兼家が余所の女と過ごしていたと道綱母は疑っていたと想定する注釈書が多いと思うが、『集成』は次のように指摘している。

兼家と為雅が揃って訪れたとすれば、宮中の御遊で一夜過しての帰りであろう。作者もそれと知りながら、あえて、女性のもとからの朝帰りに取りなして詠んだもの。明るい媚態びたを感じさせる。

(18) 『新典社新書』でも注意を払った点である。また、最近の拙稿では、注14論文、及び『蜻蛉日記』上巻の離婚状態を脱した時の贈答歌―浜千鳥の贈答歌をめぐる考察―(『言語文化研究徳島大学総合科学部』第23巻・二〇一五年一二月)でも注意した。

(19) 注18論文の注41でも概略述べた。

(20) 前々年の秋に結婚し、前年の桃の節供の記述はない。

なおその時は道綱母は妊娠中であった。

(21) 『一条撰政御集』「とよかげ」の部のテーマ設定(『古代中世文学論考』二〇〇九年一〇月)、及び新典社新書52『紫式部・定家を動かした物語―謙徳公の書いた豊蔭物語―』(二〇一〇年九月)。

(22) 『蜻蛉日記』上巻前半部の「序段」としての求婚場面―鈴木隆司論への疑問とともに―(『国語国文』82巻10号・二〇一三年一〇月)と『蜻蛉日記』兼家の求婚歌到来の場面・追考―上巻前半部の「序段」としての役割―(『国文学攷』223・二〇一四年九月)。

(23) 半世紀以上前に出された論文であるが、増田繁夫次の発言(「女流日記の発想―かげろふ日記論―」『甲南大学文学会論集国文学篇』15・一九六一年八月)は、反芻すべきものと考え、旧稿においても何度か引いている。

私達は、ともすればこの日記の持つ告白の調子の激しさにまどはされてしまつて、おそらく作者の心はこの中にむき出しに吐露されてゐるのだと思ひこみがちで

ある。この日記の背後で、作者がその効果を考へながら読者の顔つきを量つてゐるなどとは思つてもみないであらう。だがそれは多分誤つてゐる。(中略)部分的には、かなり作者の心に密着した記事もあらうが、やはり作者は読者をだますつもりで記してゐる、またはだますつもりでかかないでゐる部分が多いのである。

「つもり」とまで言えるかどうかは問題だと思ふが、「だますつもりで記してゐる、またはだますつもりでかかないでゐる部分が多い」の傍点部に加え、「構成を考えている」を付け加えたい。なお、㊦などは、よく問題になる『後拾遺和歌集』巻十四・恋四・822〜824番(歌番号は『新編国歌大観』による)に載る三首の贈答歌と同様、本来「かかないでゐる部分」になりそうなのに、構成を考えて入れられたとも目される。